

## 変貌する都市リヤド



JCCME サウジアラビア事務所 副所長 塩谷 明弘

---

2023年11月28日、2030年の万博がサウジアラビアの首都リヤドで開催されることが決定した。2025年の大阪万博からタスキを渡される形となり、日本でも大きく報道されたと聞いている。そこで、リヤドの現状をご紹介します。

### 1. 拡大する都市と公共交通機関

サウジアラビア統計局（GASTAT）によると、2022年リヤドの人口は約860万人で、2012年の約680万人から10年間で約25%も増加している。そのうち約74%（636万人）は39歳以下で、外国人比率は約48%にも上る。若い世代が大いに活躍する、巨大コスモポリタン都市といえるだろう。

増え続ける人口を受け入れるため、街は物凄い勢いで拡大を続けている。中心部にある繁華街オラヤ地区の北に位置するビジネス街「キング・アブドラ金融特区（通称KAFD）」は、新たに建設されたリヤドのランドマークだ。KAFDから更に北のエリアは、空港へのアクセスも良好で近年開発が進み、政府機関や内外資系企業が移転し始め、外資系ホテルやショッピングモール、商店、住宅が次々と建設され、街は更に北西へと拡大し続けている。

一方、オラヤ地区の南、サウジアラビア建国の象徴でもあるマスマク城周辺に広がるバトハー地区は、旧市街的な位置づけで、住民の多くが南～東南アジアからの労働者である。物価もオラヤ地区以北と比べると比較的安価で、アラブとアジアの喧騒が共存する、活気ある下町の様相を呈している。政府機関や博物館等の観光地も存在しているが、老朽化した建物も散見され、近々都市開発の波が押し寄せることを予感させる。



現在も工事が進む KAFD



旧市街バトハー地区

市内の移動手段も拡充され始めている。2014年に着工したキング・アブドゥルアジーズ・公共交通プロジェクトの一つ「リヤドバス」は、全80路線の計画で、2023年3月から順次操業を開始しており、バトハー地区を中心として市内を網羅する。乗車の際は、乗車券を購入もしくは専用のICカード「DARB CARD」を利用し、価格は初乗り4リヤル（約160円）からの設定で、120分間乗り放題である。また、停留所の多くがガラスで密閉された空間で空調が完備されており、夏の暑さ対策もなされている。

同プロジェクトの目玉ともいえる「リヤドメトロ」は、全6路線84駅・全長176kmに渡る計画で、2018年からテスト運行を開始しており、毎月のように開業の噂が出るが、現時点での開業予定は2024年初旬とされている。日本の日立製作所が一部路線の車両を納入しており、路線ごとに様々な種類の車両が楽しめるのも、鉄道好きには堪らないだろう。また、東京オリンピックのメインスタジアムの当初デザイン案を担当したザハ・ハディド建築事務所によるKAFD駅など、近未来的なデザインの駅舎が街中でも一際存在感を醸し出している。リヤドメトロは、車を持たない在住者や観光客にとって大変有難い交通手段であると同時に、ほとんどの駅まで徒歩で辿りつくことができない気候と交通環境のため、リヤドバスとリヤドメトロ双方の早期全線開通が期待される。



停車中のリヤドバス



リヤドメトロの KAFD 駅舎

## 2. 娯楽イベント目白押し

摂氏50度前後にもなる夏場に比べ、11～2月のリヤドの気温は平均20度を下回り、且つ、湿度も一桁台になることが多く、屋外で過ごすにはとても快適である。そんなハイシーズンに開催されるのが、今年で4回目となる「リヤドシーズン」だ。サウジアラビア娯楽庁（GEA）主催のイベントで、KAFDの北西ヒッティン地区にあるメイン会場を中心に市内約10カ所で開催され、遊園地的なアトラクションからスポーツ、音楽、ゲーム、映画、アニメ、飲食等、世界各国の文化まで一度に体験できる、国内最大規模の一大娯楽イベントである。

幅広い年齢層が楽しめる「リヤドシーズン」に対し、刺激に飢える若者層に向けて「ミドルビースト（MDLBEAST）」という音楽イベント群も同時期に開催されている。中でも最大規模を誇る「サウンドストーム」は、欧米の大物ミュージシャンから国内の有名DJまで幅広く招聘して行われる、いわゆる野外フェススタイルの音楽イベントだ。3日間通し券は、最も安くて定価469リヤル（約18,800円）だが、VIB（Very Important Beast）チケットになると4,499リヤル（約180,000円）と一気に跳ね上がる。特別な席や駐車場等、様々な特典・付加価値が付いた高額なチケットも、リヤドの勢いを感じさせる。



リヤドシーズン（出典：Saudi Gazette）



ミドルビースト（出典：Arab News）

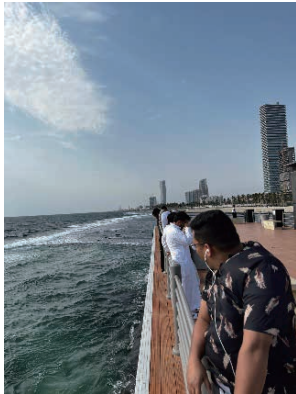
他にも、「ギガプロジェクト」と呼ばれる複数の国家プロジェクトが同時進行しており、リヤド市内・近郊でも建設が進んでいる。リヤド市内西部に位置する「ディルイーヤ」には、ユネスコ世界遺産にも登録されているサウジアラビア初代王朝の城跡「トライフ地区」があり、周辺的环境保全区域、文化施設に加え、高級ホテルやレストラン、3,000戸以上の伝統的なナジュド様式の住宅等が建設されるという。また、市内南部郊外の「キッディーヤ」は、テーマパーク、多目的アリーナ、アウトドア、モータースポーツなどの施設を備えたエンターテインメント・スポーツ・文化の拠点となるプロジェクトとして注目を集めている。

### 3. 観光立国と交通のハブへ

サウジアラビアにはイスラム教の聖地メッカとメディナが存在し、古くから巡礼地としてたくさんの旅行者を受け入れてきた。巡礼者を含む観光客数については、コロナ禍だった2020-2021年は年間約400万人程度に落ち込んだものの、2022年にはコロナ禍以前とほぼ同水準の約1,650万人まで回復しており、今後の躍進が期待される分野である。

日本人に向けても、2019年9月に観光ビザが、2022年には聖地メディナへの訪問が、解禁されている。2023年10月には、サウジアラビア政府観光局（STA）とJCBインターナショナルとの間で、JCBカード会員へのサウジアラビア観光促進を目的としたMoUが発表され、また同じタイミングで観光ガイドブック『ことりっぷ サウジアラビア』（昭文社）も発刊され、日本とサウジアラビアとの距離感が少しずつ近づいていると感じている。

前述した「ディルイーヤのトライフ地区」を含み、サウジアラビア国内には現在7つのユネスコ世界遺産が存在する。世界遺産以外にも見どころはたくさんあり、聖地への巡礼拠点となる紅海沿いの都市ジェッダは、国内第二の都市でありF1やサッカーの国際試合も開催される。避暑地として名高い山岳地帯の都市ターイフや都市アブハー、そして北部の有名な未来都市NEOM（建設中）等、今後も増えていくことだろう。



紅海とジェッダの旧市街



高原の避暑地アブハー

増加するビジネス客・観光客の受け入れとアクセス強化のため、2022年11月にはリヤドの新たな空の玄関「キング・サルマン国際空港」のマスタープランが発表された。既存のキング・ハーリド国際空港を拡張する形で建設し、2030年までに1億2千万人の旅客数を見込んでいる。また、2023年3月には国営航空会社サウディアに続くセカンドフラッグキャリア「リヤド・エア」の設立が発表された。2030年までに世界100以上の空港への就航を目標としている。いつか日本にも就航して欲しい。



キング・サルマン国際空港完成予想図  
(出典 : Arab News)



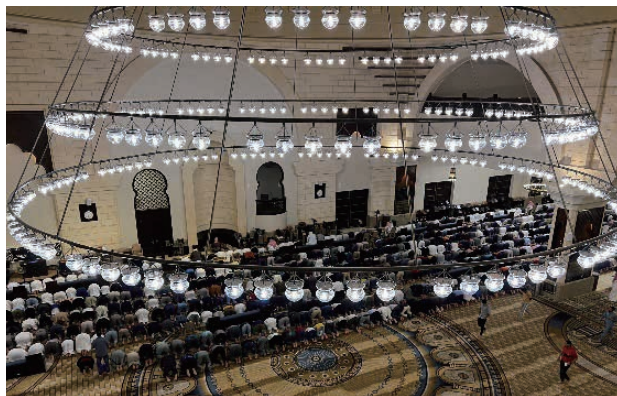
リヤド・エアの機体 (出典 : Riyadh Air)

#### 4. 生活の中での変化

世界的な物価上昇を受けて、当然リヤドでも食品や日用品等ほとんどのモノの価格は上昇を続けており、日々筆者の生活を圧迫しているが、それよりも驚いた変化がある。ある日、白いトーブと黒いアバヤに身を包んだサウジアラビア人と思しき男女が、腕を組んでショッピングモール内を闊歩していたのだ。様々な社会改革が進むサウジアラビアだが、これまで大人の男女が公共の場で腕を組んだり手を繋いだりする姿を、実際に見ることはなかった。二人は、周囲を気にする様子もなく、二人の世界に入り込んで買い物を楽しんでおり、変わりゆくリヤドを強く感じさせた。

また、最近気になったのは「ハロウィン」だ。2022年にもかなり「ハロウィン」に近いテイストのイベントはちらほら開催されていたが、元々イスラム教の行事ではないこともあり、ハロウィンの文字を見かけたことはなかった。それが2023年10月になり、初めてハロウィンと銘打つイベントや装飾品を見つけたことにとっても驚いた。2023年のクリスマス時期はどうなるのか、とても楽しみにしている。

もちろん、変化しないこともたくさんある。モスクからはアザーンが響き渡り、早朝礼拝のために朝早く起き、午後早めには仕事を終わり、日没後にまた街へ繰り出す「夜型」のライフスタイルは健在だ。ベビーカーに乗った子どもが24時過ぎにモールにいることも、日常の景色である。ラマダン月には日中の飲食ができない反面、人々は日没後の食事「イフタル」を愉しみながら夜中まで過ごす。ラマダン期間中は商店や飲食店の多くが16時以降のオープンとなるため、イスラム教徒以外も必然的に夜型の生活になるが、それはそれで興味深い体験だろう。毎年9月23日の建国記念日には、リヤド全体がお祝いムード一色となり、若者達が大きな国旗を掲げ、車で市内を縦横無尽に駆け回る光景が広がる。



ラマダン月の礼拝



建国記念日の市内

2030年のリヤド万博開催は、ムハンマド皇太子兼首相が掲げる野心的な国家戦略「サウジ・ビジョン2030」の集大成として見据えられており、躍動し変貌し続ける首都リヤドは、これからも世界の注目を集めることになりそうだ。

※クレジットのない写真はすべて筆者撮影。